

イエスさまの弟子たちは、ユダヤ教の世界の中で生きていました。その彼らは、主イエスとの出会いを通して、全く新しい世界の中で生きようとしてイエスさまについて来ました。ところが、そのイエスさまは逮捕される直前、彼らに「わたしが行く所に、あなたたちは今ついてくることが出来ない」と告げられたのです。これは弟子たちにとっては、関係の断絶を宣言されたも同然だったことでしょう。今更、ユダヤ教の世界にすんなり帰ることはできません。かといって、イエスさまの行く所についていくことも出来ないとすれば、自分の居場所がないということになります。それが、彼らが「心を騒がす」理由でした。

なぜ私たちは心騒ぐのでしょうか。なぜ、弟子たちはイエスさまの後に従っていながら、平安の中にいなかったのでしょうか。それは、神さまとの関係を結ぶことが出来ていなかったからです。父のもとへ行く道を見失っていたからです。

イエスさまは、ご自身が十字架の道を歩み、それによって父なる神さまのもとに場所を用意しに行くと言われます。つまり、イエスさまご自身が、私たちのための場所を神さまのもとに用意し、私たちの救いを成し遂げると言ってくださっているのです。

ところが、弟子たちは、救われるために自分がどのように歩むべきかを知ろうとして、イエスさまの後に従っていたのです。イエスさまの教えを求め、その教えを守っていくことによって救いに至る道を見出そうとしているのです。イエスさまは、ご自身が救いを成し遂げてくださろうとしているのに対し、弟子たちは、自分自身が救われるために歩むべき道を求めています。

その弟子たちに向かってイエスさまは、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と言われます。ここでイエスさまは、イエスさまが語られる言いつけを守って、自らの力で歩み通すことによって真理に到達し、命が得られると言っているのではありません。そうではなく、イエスさまご自身が道であると言われるのです。イエスさまの戒めを続けることによって救いが得られるのではなく、道そのものであるイエスさまを通ることによって、父なる神さまのもとに行くことが出来ると言うのです。

もし、ただイエスさまが語られる教えを聞き、それを守り抜くことによって父のもとに行こうと考えているのであれば、それは結局、自分の力によって、父のもとに行こうとしているに過ぎません。様々な教えがある中で、主イエスの教えを選び取り、それを実践することによって父のもとに行こうとしているのです。それは、道であるイエス・キリストを通らずして、自分自身が主人となって道を判断し、その道を通って父のもとに行こうとすることです。それに対してイエスさまは「わたしこそ道である」と、はっきりとお語りになるのです。

主イエス・キリストは私たちが招いておられます。「わたしこそが道、あなたの救いの道、あなたを救う道となった」と。

この道は単に、天の父のもとに到達するための道、媒介する道だけではありません。もし、到達するためだけの道であるならば、私たちはその道をゴールまで歩み続けなければなりません。そうだとすれば、間違いなく私などは、ゴールまでたどり着けず、途中でコースアウトとなってしまおうでしょう。

しかし、主イエス・キリスト御自身が道そのものなのです。時に私たちは、後退することもあれば、立ち止まってしまうこともあるでしょう。けれども、この道そのものが私たちを連れて行ってくれるのです。だからどんな人も、たどり着けないなんてことはあり得ません。なぜなら、この道に立ったその瞬間から真理と命が始まっているからです。

この道は、天へと通じる道でありつつ、すでに父のもとに至っている道です。それは、すでに今、天の父の家にこの道なる主イエス・キリストがおられるからです。それゆえに、すでに今、私たちも、この地上にあって、天の父の家とつながっているのです。結ばれているのです。